



ヒューマンインタフェース学会の活動

土井 美和子*

Activities of Human Interface Society

Miwako DOI*

Abstract– Several academic associations support the human interface research activities from various aspects (e.g., information processing, virtual realities, mechatronics, cognitive science, human factors, etc.) as special interest groups. Among them, the Human Interface Society is an independent society and the variety of the activities. The number of memberships is 1445.

Keywords– human interface, universal designs, ergonomics, cognitive psychology, analysis of the social process, human models, evaluation method, artistic designs

1. ヒューマンインタフェースとは

ヒューマンインタフェース (HI: Human Interface) は文字通り、人間との界面 (interface) である。「人とコンピュータとのインタラクションを円滑にすること」が HI の主要な目的である。ヒューマンインタフェースという語の初出は 1981 年ぐらいと言われている [1]。HI は、コンピュータやその他の機械を使って人々の交わりを支援するものであるが、人同士のつながりや環境も含めて考えるように、より広範囲を扱うようになってきている。

HIに関連するものとしては、マンマシン・インタフェース、ユーザインタフェースや人間工学がある。人間工学は、人間が自然な動きや状態で使えるように物や環境をデザインする学問である。マンマシン・インタフェースは、狭義には、人間とコンピュータなどの機械との情報のやり取りをするキーボードやマウス、ディスプレイなどの入出力装置を指す。機械の間で情報交換を行う際の、情報伝達の仕組みなどを扱う。ユーザインタフェースは GUI (Graphical User Interface) などのように、機器の使いやすさ (ユーザビリティ) を向上させる人と機械の界面のデザインを扱う。これに対し、HI はマンマシン・インタフェースのように「もの」としてのインタフェースを扱うのではなく、人や環境とのインタラクションといった「こと」としてのインタフェースを扱う。狭義のユーザインタフェースが画面のデザインを対象とするのに対し、HI は、画面だけでなく、人間を含む空間まで

Table 1: ヒューマンインタフェース学会の歴史

1998 年 9 月 28 日	ヒューマンインタフェース学会発起人大会 (東京農工大学)
1999 年 1 月 13 日	ヒューマンインタフェース学会設立総会 (東京大学山上会館)
2005 年 9 月 16 日	ヒューマンインタフェース学会臨時総会 ならびに特定非営利活動法人ヒューマン インタフェース学会設立総会
2006 年 1 月 5 日	特定非営利活動法人ヒューマンインタ フェース学会 発足

も対象としている。

今でこそ、HI の重要性は認識されているが、かつては、「もの」がすべてであり、その使い方、ヒューマンインタフェースのように「こと」を扱う HI はさほど重要視されていなかったように思える。そのような中でヒューマンインタフェース学会が、その前身でもあり計測自動制御学会ヒューマンインタフェース部会の時代も含めて、どのような活動を行ってきたかを紹介したい。

2. ヒューマンインタフェース学会の歴史

ヒューマンインタフェース学会は、2010 年 5 月 19 日現在で会員が 1445 名と、比較的小型の学会である。Table 1 に示すように、発足は 1999 年で、発足以来、13 年目のまだ若い学会である。発足から 7 年目の 2006 年に、特定非営利活動法人ヒューマンインタフェース学会として法人化を行った。横断型基幹科学技術研究団体連合 (横幹連合) には、横幹連合発足の 2003 年から参加してい

*株式会社東芝 研究開発センター 川崎市幸区小向東芝町 1

*Corporate Research and Development Center, TOSHIBA Corporation, 1 Komukai-Toshiba-cho, Saiwai-ku, Kawasaki

Received: 17 January 2011

Table 2: ヒューマンインタフェース学会以前のヒューマンインタフェースシンポジウム

開催年	開催場所	大会長	備考	
1983	関西		これからのマン・マシン・インタフェース計測制御におけるマン・マシン・インタフェース	計測自動制御学会関西支部主催
1984	関西			
1985	京都	西村 武	計測自動制御学会ヒューマンインタフェース部会主催	
1986	東京	山田 尚勇		
1987	大阪	田村 博		
1988	東京	山田 尚勇		
1989	京都	井上 紘一		
1990	東京	塚田 啓一		
1991	京都	黒川 隆夫		
1992	川崎	下村 尚久		
1993	神戸	馬場 金英一		
1994	東京	高橋 栄		
1995	京都	吉川 榮和		
1996	神奈川	尾上 守夫		
1997	大阪	堀井 健		
1998	東京	中川 正樹		

る。2007年度の横幹連合の「分野横断型科学技術アカデミック・ロードマップ」のヒューマンインタフェースはヒューマンインタフェース学会がリーダーシップをとって作成した。

ヒューマンインタフェース学会自身の歴史は浅いが、ヒューマンインタフェース学会設立以前に、計測自動制御学会ヒューマンインタフェース部会として活動をしていた。ヒューマンインタフェース部会は、1984年に設立されており、ヒューマンインタフェース部会時代から数えると活動歴は、27年目となる。

3. ヒューマンインタフェースシンポジウム

ヒューマンインタフェース学会には、その前身のヒューマンインタフェース部会から続いている一大イベントがある。それがヒューマンインタフェースシンポジウムである（Table 2, 及び Table 3）。

ヒューマンインタフェースシンポジウム自身の歴史は、ヒューマンインタフェース部会よりさらに以前の計測自動制御学会関西支部が主催した「これからのマン・マシン・インタフェース」に遡ることができる。「これからのマン・マシン・インタフェース」は当時京都工芸繊維大学におられた故田村博名誉教授（2010年逝去）が始められ、後のヒューマンインタフェース部会設立の契機に

Table 3: ヒューマンインタフェース学会主催のヒューマンインタフェースシンポジウム

開催年	開催場所	大会長	テーマ
1999	大阪	岸野 文郎	なし
2000	つくば	森川 治	新たな人間性研究へ
2001	大阪	西田 正吾	HI が切り開くニューミレニアム -IT と人間の共存をめざして-
2002	北海道	伊福部 達	「ローカリゼーション」の時代へ向けて
2003	東京	廣瀬 通孝	元気の出るヒューマンインタフェース
2004	京都	榎木 哲夫	「あいだ」を「つなぐ」インタフェース
2005	藤沢	安村 通晃	「彩」～インタフェースをいろどる
2006	岡山	渡辺 富夫	思いがあふれるインタフェース - 「身体」から「身体」へ
2007	東京	長嶋 祐二	みんなのインタフェース みんなでデザイン
2008	大阪	竹村 治雄	Jump! 新たな飛躍を目指して
2009	東京	椎尾 一郎	人と暮らしとインタフェース
2010	滋賀	仲谷 善雄	地球と生きる
2011	仙台	北村 正晴	未定

もなった。当時、ヒューマンインタフェース関係の発表の場がなく、電子情報通信学会の全国大会などでは教育工学のセッションに割り当てられ、期待しているような議論ができず、ヒューマンインタフェース関連の研究者は、居場所のない思いをしていた。著者もその一人で、計測自動制御学会誌で「これからのマン・マシン・インタフェース」の募集要項を見つけたときは、やっと仲間を見つけた思いで、喜んで申し込みをしたものである。

ヒューマンインタフェース部会主催で1985年からヒューマンインタフェースシンポジウムは、毎年開催され、今年で27回目となる。ヒューマンインタフェース部会事務局は関西に設置されていることもあり、シンポジウムは関西と関東で交互に開催されている。ヒューマンインタフェースシンポジウムは、ヒューマンインタフェース学会会員に限らず、また企業からも多くの方が参加し、その出席者数は700名を超える。年に1回、ここでヒューマンインタフェース関係者が集う祭典といえる。

協賛学会も幅広く、情報系から、電気、宇宙、建築、リハビリ、機械、自動車、原子力、照明、色彩、感性など38学会にのぼる。

2000年からは、毎回シンポジウムテーマを設け、テーマに沿った特別講演も企画されている。

ヒューマンインタフェースシンポジウムの特徴はいくつかあるが、その一つが、対話発表会である。通常の大会では、口頭発表の他に、ポスター発表がある。が、対話発表は単なるポスター発表にとどまらず、機材やPCを持ち込んだデモもOKという画期的なものであった。情報処理学会のインタラクション20XXでのインタラクションセッションが注目を集めているが、実は、その見本となったのが、ヒューマンインタフェースシンポジウムの対話発表である。対話発表の聴講者の投票で選ばれた優秀対話発表者は、イブニングセッションにて、表彰される。このイブニングセッションでの表彰で、ヒューマンインタフェースシンポジウムは大きく盛り上がる。

もう一つの特徴が、ワークショップである。ヒューマンインタフェースシンポジウムではヒューマンインタフェース研究者に多数発表していただき、最初は講習会もあわせて3日間の開催であったが、現在では、4日間の開催となっており、発表時間も当初より短くなっている。このような点を補うために、シンポジウム開催の初日に、いろいろなテーマで、忌憚なく話し合うワークショップを設けている。新しい技術動向だけでなく、ヒューマンインタフェース論文の在り方など、様々な話題で集っている。

4. ヒューマンインタフェース学会の現在と展開

多くの学会が会員減などいろいろな課題を抱えている。会員数については、ヒューマンインタフェース学会は、人数こそ少ないが、微増しているの、現在のところ、その心配はない。

ヒューマンインタフェース学会は2009年に10周年を迎えた。若い学会とはいえ、10年という月日を積み重ねてきたことで、前例ができその前例に倣えばよいというようになってきている。前例の踏襲ではなく、常に改革する体質とすることがヒューマンインタフェース学会の課題であると考えている。

改革の一つが、研究会運営の変更である。従来は、研究会担当理事が担務していた研究会や、独自の研究談話会があった。これを研究会担当理事が担務する研究会運

営委員会のもと、研究会（3種類）が所属するように見直しを行った。さらに、研究報告集の完全電子化も実現する。

研究会運営にも絡むが、倫理問題は今や学会にとって大きな課題であり、ヒューマンインタフェース学会においては、特にヒューマンインタフェース研究開発のための倫理指針の策定が懸案となっていた。これに関しては、榎木哲夫前会長（京大）が日本人間工学会の倫理規定を参考に、「ヒューマンインタフェース研究開発のための倫理指針」というたたき台を作られた。これに基づき、日本人間工学会からもご理解をいただき、2010年度に策定が完了し、ウェブサイトにも掲載している。

また、電子化委員会でも長年の懸案であったヒューマンインタフェース学会のウェブサイトのリニューアルが実現される。

電子化対応はいまや避けることができない。個人情報保護という観点で、学会刊行物での扱いも検討が必要となる。学会毎に研究会報告の公開ポリシーが異なっており、共催の覚書なども見直しが必要となり、電子情報通信学会など見直しを行っている。

つまり、社会環境の変化により、前例通りに活動していても、法令順守などで問題が出てくる可能性が高くなってきていることが大きな課題である。

ただし、法令順守ばかりが前面にたち、自由闊達な雰囲気や若手も高齢者も皆、元気に活動できるヒューマンインタフェース学会としていきたい。

参考文献

- [1] 田村博編: ヒューマンインタフェース, p. 544, オーム社, 1998年.
- [2] ヒューマンインタフェース学会ウェブサイト: <http://www.his.gr.jp>

土井 美和子



1979年東京大学工学系修士課程修了。同年(株)東芝研究開発センター入所、現在首席技監。東京大学客員教授、東工大経営協議会委員、国立情報学研究所運営会議委員、科学技術振興機構運営会議委員、ヒューマンインタフェース学会会長などを務める。情報処理学会フェロー、電子情報通信学会フェロー、IEEE Fellow。博士(工学)。